13 「死んだ者を思い出す」のが務め

「わしは長生きできそうにない」。九十に近い父の不安げな言葉に、一瞬戸惑うが「お父さん、長生きされていますよ」と言いかけた言葉をあわててのみこみました。

長生きとは現在から数えていうことで、父にとっての長生きとは、後何年あるかが問題です。父がもう長生きしていると思うだけで、不遜、親不孝は極まっています。こんな不孝者に対し孔子はやさしく諭されました。

「子たる者両親の年齢を忘れてはならない。一つにはその長命を喜ぶために。一つには老い先の短いことを忘れずに、いよいよ孝養を励むために」(論語)。

それから一年たらず、嫁(私の妻)に抱かれて父はあっけなく昇天。親が子に長くはないと告げる時、それは別離の予告で、遺る子の味わう悲しみを軽くしようという配慮もあってのことです。父よ! お許しあれ。

晩年の父は口癖のように「生きる価値がなくなった」と、もはや何もできなくなった人生を心底寂しがった。小学校どまりの父は苦学力行、価値だけを追う人で、小さな本箱には福沢諭吉と新渡戸稲造のものしか置きません。仕事をすますと、朗々と暗唱するように読んでいた後ろ姿に、子供心に感動したものです。

節約の人だった。石ころ道では靴を脱ぐほどだから、それは三十年ももっていたし、お箸は使い続けて子供用の短さになっていた。こうしてためた全財産を、それでも、私の計画する二つの福祉施設に提供してくれた。施設の順調な歩みを見て、価値意識を高めたようです。ホームに来ては、だれかれかまわず説教します。しかし、それもやがてさめていきます。

老人クラブに顔を出しますが、新入りの父の座る場所はありません。半世紀以上も住んでいた大阪から私の住む別府への移住です。だれも父の前歴など問題にしません。それが父には一番こたえました。老年期になってからの移動は打撃です。

老年になると、ひとは円満型と、持ち前の性格がルーズになる型と、逆に鋭くなる型の三つに分かれます。父は後の型で厳格さを加える方です。孫たちは私に不平めいたことを言います。「時にはお散歩も大おじいちゃん抜きのもしようよ」。父は外での買い食いは、ひ孫たちにも許さないからです。別府の街はゆるやかな坂、父にはそれも苦になり家にこもる日々になりました。

終日座り続ける父は、私に過ぎ去った日のことをしきりに話しかけます。同じことの繰り返しでも、その時の父は生気を取り戻し、口中に泡するほど饒舌になります。お茶を運ぶ孫嫁にも万葉の相聞歌を示します。しかし、やがてアルバムに独り見入っていたり、母の遺した歌を書き写したり、昔の歌を低く口ずさむなど、ただただもの悲しいような日々になっていきます。

暮れなずむころ、黙って対座し続けていると、ポツリと言います。「悲しいねえー。結局、死んだ者は思い出の中に生きているだけだ。だから、死んだ者を思い出すのが最年長のわしの務めだよ」。それが父の最後に至った思いです。来世での親族集団との出会いを信じ、それをさまざまに描いている。その来世

図は当然、過去の思い出の巻き戻しでしょう。いまその父逝って九年。

そのままにしていた父の遺品は、大部分がわが子や子孫には不用。それらを遺して、彼等の重荷になっては父がかわいそう。だから一つ二つと父と語るが如く手にし、捨てる時は〝父よ、許して〟と合掌。

父よ、こうしていると、何かしら、ようやくあなたと同じ思いになっていくようです。モンテーニュは亡父の外套を着て「父を着ている」と懐しんだそうです。私が座っている座布団はお父さんのもの。お父さんは終わりごろは黙りがちでしたね。

お父さん、そうですね！　お互い本当の思いは語りたくても、結局、だれに話す術もなく、ただ墓場へと携えいくだけなんですね。